

# また授業をやりたいなあ

「星の花が降るころに」は、一年国語の教科書に載っている小説教材です。過去の友人関係にしがみつこうとしていた女子中学生の主人公が、周りの人たちの後押しで、勇気を出して新しい一歩を踏み出す決心をするというストーリーです。

昨日の国語の研究授業で、一年D組がこの小説の学習に挑戦しました。最後の場面の「新しい一歩を踏み出す決心をする主人公」を見つける、話のクライマックスを扱った授業でした。

「言葉の意味や効果にこだわった発言ができており、生徒たちは確実に力を付けていますね。」

「他の場面の内容やこれまでに学習したことを結び付けて考えようとしていたことがすばらしい。」

参観者全員が、生徒たちの発言の質の高さや、学ぼうとする積極的な姿勢を絶賛していました。見ていた私も、たった半年で中学生らしくなった生徒たちの成長を頼もしく感じました。

そんな中、私が特に興味をもった二つの発言があります。その二つがまさしく勉強の本質、仲間と学ぶ意味だと思いました。

K・A君が挙手をして発言しました。自分の読み取ったことを、彼は積極的に仲間にも伝えました。これから書くことは、彼のこの発言が生み出したと言ってもよいでしょう。

「百十三ページの十三行目から、主人公は（自分がしがみつこうとしていた）友人の夏実のことをあきらめたと思います。」

すばらしい発言でした。的を得ているかどうかということではありません。自力で読み取ったことを包み隠さず仲間にも発信したという点で価値ある発言だと感じました。授業が楽しくなるどうかは、こういう素直な発言にかかっています。

すぐさま、近くの席のA・Sさんが反応しました。この反応が、二つ目のすばらしい発言でした。

「私はK・Aさんと違って、『銀木犀の木の下を』くぐって出た」というところから、『私は自分で生きていくんだ』という覚悟や決心をしたのだと思いました。」

この後、他の仲間の発言が続きました。K・A君とA・Sさんの短いやり取りに刺激を受けたように仲間の発言が生まれました。そして、最後の場面の主人公の変わりように、学級全員でたどり着いた素敵な授業が終わりしました。

この授業で最も大きな学びがあったのはK・A君だと思っています。自分が積極的に考えを発信したことで、仲間から大きな大きな見返りももらったからです。その見返りが、より進化した自分を作り上げる材料となります。K・A君、よかったね！授業をやらなくなつてしばらく経つ私ですが、こういう授業を見ていると、「また授業をやりたいなあ」と思っています。

（十月十四日記）

